

【 研究論文 】

沖縄県在住フィリピン人女性の生活実態調査

仲里 和花

(沖縄キリスト教短期大学)

Research on Actual Living Conditions of Filipino Women Living in Okinawa

NAKAZATO Kazuka

(Okinawa Christian Junior College)

Abstract. According to vital demographic statistics provided by the Ministry of Health, Labour and Welfare, marriages between Japanese husbands and Filipino wives comprised 23 % of all international marriages between Japanese husbands and foreign wives in Japan in 2010. This statistic has increased notably since the 1980s. The main reason attributed to this increase has been the increase in opportunities for Japanese men to meet Filipino women who have entered Japan as migrant workers, which is a consequence of both overseas employment policy promoted by the Government of the Philippines and Japan's labor shortage. Okinawa is no exception, as the prefecture has also seen an increase in the Filipinos population since the early 1980s. This segment of the population now represents 18% of all foreign residents in Okinawa. Therefore, international marriages between Filipino women and Okinawan men are likely to continue to increase in the future. This article aims to reveal the actual living conditions of Filipino women married to Okinawan men, and examines some of the major problems of intercultural adaptation in Okinawan society.

In this study, a questionnaire survey was distributed to 250 Filipino women married to Okinawan men. The return rate for the survey was 53%. So, the 133 responses from Filipino women regarding communication problems in their families, their community activities and their current conditions were collected and analyzed.

The results show that approximately 25% of Filipino wives feel that their marital relationships are difficult or unproductive because of significant miscommunication and differences in their cultural values. About 46% have children who experienced identity crisis or bullying. About 46% experienced problems with their parents-in-law because of difficulty in adapting to the Okinawan family system, which includes ancestor worship. As for community activities, even though about 50% of participants have high academic qualifications, they are limited to unskilled labor largely because of the language barrier. In this thesis, I examine the problems of Filipino women living in Okinawa prefecture from a cross-cultural

0. はじめに

グローバル化に伴う人口移動により、日本国内でも外国人との接触機会が増え、日本人と外国人の国際結婚も年々増加している。厚生労働省の人口動態統計によると、国際結婚件数が 1975 年には 6,045 件、2005 年には 41,481 件で、30 年間に約 7 倍に増加している¹⁾。また、組み合わせ別に見ると、1974 年までは、「夫外国人・妻日本人」の件数が、「夫日本人・妻外国人」の件数を上回っていた。しかし、1975 年を境に逆転し、後者が急増傾向にある(賽漢、2006)。これは、1970 年代後半より始まった「移民の女性化」(西口、2009)の現象に伴って、日本へ出稼ぎに来る外国人女性と日本人男性の接触機会が増加したことによる。なお、2006 年の統計で、外国籍妻を国籍別にみると、フィリピン人女性との婚姻件数が最も多く、「日本人夫・フィリピン人妻」の結婚件数は 12,150 件で、「夫日本人・妻外国人」の結婚件数全体の 34%を占めている(佐竹、ダアノイ、2006)。その後、2005 年 3 月に入管法が改正され、興行ビザによる入国審査が厳しくなったことが原因で、来日するフィリピン人女性の数が減り、2010 年には、「日本人夫・フィリピン人妻」の結婚件数は 5,212 件まで減少しているが、依然、中国人妻に次いで、2 番目に多く、「夫日本人・妻外国人」の件数全体の 23%を占める(厚生労働省、2010)。

沖縄県でも 1980 年代から、基地歓楽街²⁾や観光地歓楽街を含む地元歓楽街で働くフィリピン人女性労働者の数³⁾が急増し、県出身の男性と出会い、国際結婚するケースが増加⁴⁾している。沖縄は、第二次世界大戦前、多くの県人をフィリピンへ移民として送り、戦後は、米軍基地雇用者として多くのフィリピン人を受け入れ、他府県とは異なる特異な関係性をフィリピンと構築してきた。日本とは異なる歴史的関係性を持つ沖縄という地で、県出身男性(以下、沖縄人男性または沖縄人夫と略す)と結婚したフィリピン人女性は、どのような異文化適応の問題を抱えているのか、他府県とは異なる問題を抱えているのか、あるいは類似した問題を抱えているのか。本研究では県内在住フィリピン人女性を対象に生活実態調査を実施し、その結果に考察を加えた。

1. 調査・研究の背景

調査・研究の背景として、まず、フィリピン人女性と日本人男性の国際結婚の増加の要因を考え、そして、フィリピン人女性・沖縄人男性の国際結婚の背景は、他府県とどのように異なるのか、沖縄とフィリピンの歴史的関係性を概観しながら、沖縄県在住フィリピン人女性の生活実態を調査する意義を考えてみたい。

先行研究(佐竹、ダアノイ、2006)では、日本におけるフィリピン人女性と日本人男性の国際結婚増加の背景として、送出し側フィリピンと受入れ側日本の社会的・経済的事実があることが指摘されている。

まず、送出し国フィリピンの現状を見ると、1970 年代後半から出稼ぎ労働者の出国が増え、男性が中東諸国へ建設労働者として、1980 年代後半から女性が香港・シンガポール・中東へ家事労働者、または日本へエンターテイナーとして出稼ぎに出るようになり、フィリピン人口 8000 万人のうち 10%の 800 万人が海外在住者となった(佐竹、ダアノイ、2006)。さらに、1982 年には国策として海外雇用庁が設立され、日本の受け入れを円滑にするフィリピンでの送り出し制度も整備された(西口、2009)。フィリピン人が海外へ出稼ぎに行く原因は、経済的要因が大きく、佐竹・ダアノイ(2006)の研究によれば、国内の低賃金の問題があり、例えば、2005 年のフィリピンの法定最低賃金は 1 日 325 ペソ(650 円)であるが、5 人家族が生活していくためには 1 日 593 ペソ必要である。それだけ稼げる人は中流階級以上に限られているという。その結果、単純労働でも高収入を得られる日本などへ出稼ぎに行くフィリピン人が増加している。

さらに、受入れ国日本の現状としては、1980年代以降の人手不足の問題を解消するため発展途上国との賃金格差を利用して、安い国際移住労働力を受け入れるようになった。女性は主に興行ビザでの就労、男性は3K労働に限って、受け入れを許可された。その他の理由としては、日本女性の晩婚化が進み、結婚難に直面した日本人男性が経済力を背景に、発展途上国の女性を花嫁として受け入れるようになった。その例として、「農村花嫁」の現象も日比国際結婚増加の要因の一つである。

以上のように、フィリピンの国策、貧困と高い失業率、日比の経済格差、そして、日本の労働力不足と「花嫁不足」など、両国の経済的・社会的事情が重なったことが、日比国際結婚増加につながる要因となっている。

沖縄県でもフィリピン人の人口は80年代から年々増加を続け、1991年には1,160人だったが、2011年には1,643人と1.4倍に増え、県在住外国人の18%を占める(法務省、1991、2011)。県出身男性と結婚したフィリピン人女性も多い。増加の要因としては、1980年代から、エンターテイナーとしてフィリピン人女性が参入しはじめ、1990年代には、基地歓楽街がある金武町で200人以上のフィリピン人女性が米兵相手にクラブで働いていたという推計もある(鈴木、玉城、1997)。

また、上述したように、沖縄県は、他府県と比較して、歴史的に異なる関係性をフィリピンと構築している。例えば、第二次世界大戦前から、移民県として多くの移民をフィリピンへ送り出し、1904年には、360人の沖縄県人が、ルソン島北部のベンゲット道路建設のため、フィリピンへ渡った。1919年頃から、沖縄県出身移民者数は確実に増え始め、1923年以降は、全国フィリピン移民者数の40%から60%が、沖縄県人であった。フィリピンのダバオでは、アバカ(麻)生産のため農業労働者として、多くの県人が日本企業で働いている。ダバオの日本人社会の中では、沖縄県人は他の日本人より低く見られていたことで県人同士が結束を固め、日本人社会よりも現地のフィリピン人社会に近づき、定着していったと言われている。(鈴木、玉城、1996)。

さらに、戦後は、沖縄の米軍統治時代、米国民政府が、在沖米軍基地の雇用者をフィリピンで募集し、1940年代後半から50年代前半には、6千人のフィリピン人が沖縄で働いていた。また、地元住民より雇用待遇が良く、裕福な生活をしていた。沖縄人女性と結婚するフィリピン人男性も多く、その後、2世、3世がそのまま沖縄に定住するか、あるいはフィリピンへ帰国している(鈴木、玉城、1996)。

このように、沖縄は、移民をフィリピンへ送り、その2世、3世をUターン移民として受け入れられたり、米軍統治がもたらした外国人労働者と沖縄県人の間にできた子どもたちにより、「多エスニック社会」(鈴木、玉城、1996、p. 74)を築き、他府県よりも、フィリピンの人々や文化を容易に受容する要素を内包している可能性がある。

筆者は、1994年から1998年まで、フィリピン女子大学に留学し、社会福祉を専攻した。ストリートチルドレンの養護施設でケースワーク、貧困地域でコミュニティーワークの実習を経験し、フィリピンの貧困層で生活する人々を見てきた。1999年には、1年間、現地のNGOでソーシャルワーカーとして働き、当時、エンターテイナーとして日本へ出稼ぎに行き、雇用者やパートナーから虐待を受けたり、過酷な労働状況に耐えられず、精神疾患を患って帰国したフィリピン人女性達をサポートしてきた。このようなフィリピンでの体験から、帰国後、沖縄で、県在住のフィリピン人女性達の生活や異文化適応の問題に関心を持つようになり、本調査を始めるきっかけとなった。

日本では、フィリピン人女性エンターテイナー(バレスカス、1994; 武田、2005)、日比国際結婚(桑山、1995; 高畑、2003)などの研究が見られ、また、沖縄県でも県在住フィリピン人労働者の研究(鈴木、玉城、1996、1997)が行われている。しかし、沖縄県出身者と国際結婚した

フィリピン人女性の生活実態については、ほとんど研究されていないのが現状である。本稿では、沖縄県在住フィリピン人女性の生活実態調査を行うことで、他府県に住む外国人とは異なる異文化適応の問題点、または共通の問題点を明らかにし、先行研究に新たな視点を加えると同時に、沖縄社会が多文化共生の理念を内包しているのかどうか、その可能性を探り、多文化共生に向けて、沖縄県で、どのような取り組みができるのかということを検証する。

2. 在日フィリピン人女性に関する先行研究

在日フィリピン人女性については、エンターテイナー労働者の問題、日比国際結婚の問題など多くの研究がなされている。ここでは、日本在住フィリピン人女性と沖縄県在住フィリピン人女性に分けて、先行研究を紹介する。

2. 1. 日本在住フィリピン人女性の先行研究

まず、定松（1996）の研究では、在日フィリピン人女性を、日本人男性と出会った経緯によって4つに分類している：（1）日本人男性が海外赴任中あるいは旅行中に出会い、結婚した「現地出会い型」、（2）「興行ビザ」で来日し、日本で知り合った相手と結婚した「国内出会い型」、（3）行政の仲介によって見合いし、結婚した「行政仲介型」、（4）「日本人花嫁」としてブローカーによって斡旋され結婚した「ブローカー仲介型」（p. 68）⁸⁾。定松は、「出会い系」や「仲介型」のいずれにしても、彼女たちを受け入れる日本人夫の家庭が、「家」制度に則った習慣や価値観をもつ傾向がある一方で、フィリピン人女性は結婚における夫婦の愛情の重視と個人主義の価値観をもち合せているため、両者の間に認識のズレが生じ、ストレスの重要な原因になっていることを指摘している。また、定松は、子どもの問題について触れ、「アジア」に対する日本人の差別意識や経済格差による差異が、アジア系ダブルの子の差別やいじめにつながり、子どもたちは、2つの等価の文化を持つダブルの子ではなく、どちらか一方の文化を否定せざるを得ない状況におかれていると述べている。

このように、定松（1996）は、個人主義の価値観を持つフィリピン人女性と伝統的な「家」制度の習慣を持つ日本の家族との間で葛藤があることや、フィリピン人の母親を持つことで、日比国際児がいじめや差別を受け、フィリピンの文化を否定してしまう問題を指摘している。

次に、高畑（2003）の研究では、宮島・長谷川（2000）の先行研究を参考にして、在日フィリピン人の問題事例を次の4つに類型化している：（1）共同生活の破綻、滞在の不安、（2）結婚観における相克、（3）日本的家族文化との葛藤、（4）夫婦間の上下関係という「障壁」（p. 261）。

この研究では、フィリピン人妻と日本人夫の結婚観の認識の相違、夫の両親との強い上下関係のため、家庭内でフィリピン人女性が嫁として低い位置に置かれること、フィリピン人女性が日本という外国で暮らす不安からくる自信欠如のため夫婦関係で劣位の立場におかれ、夫がフィリピン出身の妻を見下す態度などが指摘されている。

また、高畑（2003）は、定松（1996）と同じように、日比の経済格差による差異が日比ダブルの子どもへの差別やいじめにつながることを指摘している。例えば、フィリピン＝貧しい＝水商売というイメージが成り立っていることから、子どもがいじめを受け疎外されてきたケースを挙げ、子どものアイデンティティ形成のために民族子ども会の設立が必要であることを指摘している。さらに、フィリピン人女性たちは、同胞の女性達で自助グループを作り、その活動は彼女たちが異文化社会で生活していく上で、精神的支えとなっていることを述べている。

第三に、佐竹・ダアノイ（2006）の研究を紹介する。第1章では、フィリピン人女性が日本の風俗産業に組み込まれていくきっかけとして、1960～1980年代、日本人男性のアジア買春観光ブームを挙げ、その後、マニラを拠点に日本人客に買春を斡旋していた日本人業者（元暴力団関係者など）がフィリピン人女性をリクルートし、興行ビザを取らせ、日本のバーやクラブで働か

せるようになった経緯が述べられている。第2章では、日本における国際結婚の推移として、戦後は米軍関係者と結婚する日本人女性（戦争花嫁）のケースが多かったのに比べ、高度経済成長期を経て、日本が経済大国になった80年代から、アジア出身の女性と日本人男性の国際結婚が急増し、その背景として、アジア諸国との経済格差を挙げている。第3章では、フィリピン人「農村花嫁」の問題を検証している。80年代半ば、結婚難の問題を解決するため、町や村役場が民間の結婚業者と提携して、地域の男性と外国人女性を取りまとめた動きとして、山形県や徳島県の事例を挙げている。しかし、「農村花嫁」の問題は、「日本の女性が嫁に来ないからといって、貧しい外国の女性をつれてこようというのは安易な発想」(p. 72) という批判で、行政は関与しなくなり、また、外国人花嫁を受け入れる農村家族が、花嫁に家の跡継ぎを産むようにプレッシャーを与えたり、男女平等志向の強いフィリピン人花嫁が農村の家父長的習慣に適應できないという問題が生じていることを指摘している。第4章では、在日フィリピン人女性に対するイメージを検証している。日本での在日フィリピン人女性のイメージは、エンターテイナーとして、貧しく、絶望的な性的奴隷、またはずるい売春婦として、マスコミや出版業界で描かれる傾向がある一方で、農村に嫁ぐフィリピン人女性は、家事、育児、親の世話、介護を担う従順な花嫁としてのイメージが描かれ、これらのイメージを変えていくために、フィリピン人女性たちが、テレビドラマなどに抗議したり、地域社会でフィリピン文化を紹介する活動を行っていることが述べられている。第5章で、フィリピン人女性と結婚した日本人男性に焦点を当て、異文化体験や妻とのやり取りを通じて、彼らが視野を広げたり、生き方を見直すようになる過程を明らかにしている。この章では、男性との平等な関係を求める「男女平等指向」をもつフィリピン人女性が、仕事中心で「男性優位」(p. 118) の価値観を持つ日本人夫を、日常の抵抗によって変えていく姿が描かれている。

以上のように、佐竹・ダアノイ(2006)は、フィリピン人妻・日本人夫の国際結婚の背景にある日比の経済格差の問題を指摘している。また、この国際結婚の異文化適應の問題点として、フィリピン人女性と日本人夫のジェンダー観の認識の相違を挙げている。さらに、日本社会でのフィリピン人女性に対するネガティブなイメージや偏見を変えていくための彼女達の活動やフィリピン人女性と結婚した日本人夫の意識が変えられていく姿を描き、フィリピン人女性の存在が、日本社会をより多文化共生へ促していることを述べている。

これらの先行研究から、日本在住フィリピン人女性が抱える問題を、次のようにまとめることができる。

- 1) 日比間の経済格差や日本人のアジアに対する差別意識を背景にした国際結婚であるため、フィリピン人女性が日本の社会や家庭内で不利な立場におかれやすい。
- 2) 「家」のしきたりや存続を重視する日本の家族文化を持つ日本人夫の家族と、個人主義的価値観を持つフィリピン人妻の間の認識のずれ。
- 3) 家父長的志向を持つ日本人夫と、男女平等志向を持つフィリピン人妻の間の葛藤。
- 4) フィリピン系ダブルの子どもが差別やいじめを受け、フィリピンのエスニック・アイデンティティを否定してしまう問題。

このような視点を踏まえて、本稿では、沖縄県在住フィリピン人女性の生活実態調査の結果を基に、日本の先行研究との比較を行い、在沖フィリピン人女性の異文化適應の問題を考えていく。

2. 2. 沖縄県在住フィリピン人女性の先行研究

沖縄県在住フィリピン人女性に関する研究は少ない。その中で、戦後の沖縄のフィリピン人について詳しく考察しているのが鈴木・玉城(1996、1997)である。

鈴木・玉城(1996)によると、沖縄のフィリピン人は2つのグループに分かれる。日本復帰以前に沖縄に来て定住しているオールドカマーと、1980年代から外国人労働者として来沖したニュー

一カマーである。

オールドカマーと呼ばれるフィリピン人は、前述したように、米軍が沖縄を統治していた1940年代後半から50年代前半にかけて、在沖米軍基地内設備の建設、整備のために雇用された(鈴木、玉城、1996)。基地関係雇用者としてフィリピン人が多く採用された理由は、フィリピン人の英語力が重要視されたこと、さらに、フィリピン人労働者の建設技術や知識が高く評価されていたこと、また、沖縄での基地労働の賃金がフィリピンの賃金相場より2倍から3倍高かったため、多くのフィリピン人が沖縄で働くことを望んだことが挙げられる。オールドカマーの中に占めるフィリピン人女性の割合は少なかったが、主に、基地関連雇用者の妻として、または基地内で働くメイドや洗濯婦として在沖していた(鈴木、玉城、1996)。その後、1965年、米国民政府は、地元県人を優先的に雇用するため、フィリピン人労働者を全面解雇し、多くのフィリピン人が帰国せざるをえない状況に追い込まれた。沖縄人女性と結婚したフィリピン人は、沖縄人妻を連れてフィリピンへ帰国する者もいれば、沖縄人妻を沖縄に残して帰国する者もいた。

一方で、ニューカマーと呼ばれるフィリピン人は、1980年代前半から参入した若いフィリピン人女性で、彼女たちの職業は、基地歓楽街や観光地歓楽街で米軍や観光客を相手に働くエンターテイナーであった(鈴木、玉城、1997)。もともとは、これらの歓楽街では、地元の沖縄女性が働いていた。しかし、ベトナム戦争によって流入した米軍兵士、日本復帰から海洋博の好景気に来沖した男性観光客が、沖縄の売買春産業に高額ドルと円を落とすに際し、売買春産業の底辺にいた沖縄女性が、かなりの額を取得し、底辺労働者としての地位から抜け出していった(鈴木、玉城、1997)。その後、1980年代前半から、その空洞化した底辺部分を埋め合わせたのが、出稼ぎ労働者としてやってくるフィリピン人女性たちであった。フィリピン人女性たちは、労働力不足となった沖縄の性産業を補うために、エンターテイナーとして組み込まれていった。

本調査のサンプルでは、大半のフィリピン人女性たちが結婚前、エンターテイナーとして働いていた、いわゆるニューカマーに属する。結婚後は95%の女性が配偶者ビザや永住ビザを取得し沖縄県に定住している。本稿では、ニューカマー、主に興行ビザで外国人労働者として来沖し、沖縄人男性と知り合って結婚後、配偶者・永住者・定住者のビザの資格を得て、沖縄に定住しているフィリピン人女性に焦点をあて、彼女たちの生活実態を明らかにするとともに、彼女たちが沖縄社会という異文化に適応していく中で、どのような問題を抱えているのか、日本の先行研究の事例と比較しながら、コミュニケーションの観点で考察していく。

3. 調査研究の視点・目的

3. 1. 調査の目的

本稿では、沖縄人男性と国際結婚した県在住フィリピン人女性に焦点をあて、コミュニケーションの観点から、彼女たちの異文化適応の問題を考察する。特に、家族(夫・子ども・夫の両親)とのコミュニケーション、地域社会や母国との関係に焦点をしばって考察していく。

フィリピン人女性は、母国フィリピンの生活の中で培ってきた価値観や生活習慣を身に付けており、沖縄人男性と結婚後、彼女たちが異文化沖縄社会で生活し、人びとと相互作用(コミュニケーション)を行う中で、おのずと、誤解・摩擦・齟齬が生じることが考えられる。コミュニケーションを困難にしている原因は、例えば、沖縄県民の価値観、沖縄の伝統的習慣、家族制度、規範、日常生活など、フィリピン文化との様ざまな相違が考えられる。特に、彼女たちのコミュニケーションの桎梏となっている文化的要因(言語・信念・価値観・態度の相違)に焦点をあてて分析していく。コミュニケーションの問題とその原因を明らかにすることは、フィリピン人女性と夫、家族、地域社会との良好な関係を築くための資料となり、異文化社会を積極的に生きていくための何らかの示唆が得られるものと考えられる。

3. 2. 調査の対象地域・対象者および調査方法

本調査では、2011年3月から8月、沖縄人男性と結婚した沖縄県在住のフィリピン人女性を対象にアンケート調査を実施した。フィリピンは全人口の93%がキリスト教信者であり、その中でもローマ・カトリック教会の信徒が全人口の85%を占めることから（宮本、1993）、県内のカトリック教会を訪ねたところ、多くのフィリピン人女性が通っていることがわかった。県内には20のカトリック教会があるが、そのうち10か所（本島中南部地域、離島地域）のカトリック教会を訪問し、各教会のフィリピン人グループのリーダーに調査内容を説明した上、アンケート調査票を教会に通うフィリピン人女性へ配布してもらうように依頼した。調査票は、総計250人に配布し、そのうち133人から回収（回収率53%）した。133人の回答者のうち127人（95%）はカトリック教会を通して回答を得たことになる。その他の回答は、筆者の知人を通して得ることができた。また、2011年5月から7月にかけて、3か所（本島中南部地域）のカトリック教会で参与観察を行った。参与観察については、与那原教会（南部）で、毎月第二日曜日の夕方、タガログ語のミサが行われるが、このミサに2回出席し、ミサの後の茶話会でフィリピン人信者の方々と交流した。小録教会（南部）では、毎週土曜日の夕方、英語のミサが行われるが、参加者はほぼフィリピン人会員である。このミサに3回出席し、ミサの後の茶話会に参加した。読谷教会（中部）においては、90%の教会員がフィリピン人であり、その教会堂新築祝いのパーティーに参加し、そこで、礼拝や賛美の時を共にし、子ども劇、民族ダンス、フィリピン民謡などの余興を見学し、フィリピン人信徒と交流を行った。参与観察では、リラックスした雰囲気の中で、フィリピン人の方々と話し合いができ、彼らの日常の生の声を聞くことができた。

3. 3. 調査の枠組みと設問項目

沖縄人男性と国際結婚し、沖縄に定住しているフィリピン人女性の異文化適応問題を把握・認識するために、彼女たちの特性や実態を基本軸とした設問項目を設定し、英語による調査票（8項目64設問）¹⁰で実査に至った（表1、2を参照）。本稿では、分析の対象を「家族（夫・子ども・夫の両親）とのコミュニケーション／家族の問題」、「地域社会での活動」、「現在の状況」に絞って考察した。

4. 調査結果および考察

4. 1. 個人および家族の特性

4. 1. 1. 妻の特性

この調査には24才から61才までのフィリピン人女性たちが参加し、平均年齢は43才であった（表3-1）。彼女たちは沖縄の全域（北部・中部・南部・離島）で居住し、最も多かったのが、離島地域で、70%（n=93）であった（表3-2）。沖縄での居住期間は、平均13年間であった。フィリピン人女性達が沖縄に来県した年代は、1973-2010年の期間にわたっている。最も多かった年代は1990-1999年で49%（n=65）の女性が来県し、47%の女性が20代、31%の女性が30代に沖縄に来ている（表3-3、表3-4）。彼女たちの学歴は、短大、大学、大学院を合わせると43%で、高卒42%とほぼ同率で、本調査対象のフィリピン人女性たちは高学歴であることがわかる（表3-5）。

結婚前の就業状態について回答した女性は133人中55人で、その中で多かった職種が、エンターテイナー35人（64%）であった。結婚後は、81人（61%）の女性が就業し、最も多かった職種は、ホテルの部屋係（清掃など）16人（30%）であった（表3-9）。

現在、彼女たちの持っているビザの種類は、永住ビザが108人（81%）、配偶者ビザが19人（14%）であった（表3-7）。永住ビザは、3年以上の結婚生活、在留期間を経た外国人配偶者に与えられる。「永住者」資格を得ると、更新の手続きがなくなり、離婚後も沖縄に住み続けることができる。

表1: 特性についての設問項目

特性 (設問 63)		
<妻の特性>	7)ビザの種類	<子どもの特性>
1)年齢	8)出身地	1)子どもの数
2)居住地	<夫の特性>	2)年齢
3)来県した年	1)年齢	3)就学状況
4)来県した年齢	2)学歴	4)出生地
5)学歴	3)職業	
6)結婚前と現在の職業		

表2: 家族・地域社会での生活についての設問項目

設問項目
1)沖縄に移住する前の状況 (設問 1~3)
2)夫との関係について (設問 4~17)
3)子どもについて (設問 18~27)
4)夫の両親との関係について (設問 28~37)
5)友人関係について (設問 38~41)
6)日常生活について (設問 42~55)
7)就業状況について (設問 56~62)
8)自由回答欄 (設問 64)

フィリピン諸島はルソン諸島、ヴィサヤ諸島、ミンダナオ諸島の3つの群島からなる。この調査に参加した女性の出身地で、最も多かったのがルソン諸島で56% (n=75) を占めた (表 3-8)。ルソン諸島出身の女性が6割近く、そのうち首都圏マニラ出身の女性が35%いることから、彼女たちの半数以上が都市部で生まれ育ったことがわかる。都市部では日本への出稼ぎを斡旋してくれるブローカーや、興行ビザ取得に必要な芸能歴証明書を取得するための養成学校が多いことから、日本への出稼ぎの機会が得られやすいと考えられる。

4. 1. 2. 夫の特性

夫の年齢は36才から80才までの幅があり、平均年齢は54才であった (表 3-1)。夫婦の年齢差は、平均11才 (夫が年上) で、日本人同士の夫婦の年齢差が平均1.7才¹¹⁾であることを考えると、フィリピン人妻/沖縄人夫の年齢差は5倍ほど高いことがわかる。夫の学歴について、最も多かったのが高卒で45% (n=60)、短大、大学、大学院を合わせると25% (n=32) で (表 3-5)、フィリピン人妻の短大卒以上の学歴 (43%) と比較すると、妻の学歴のほうが高い。夫の職業については、「農林漁業従事者」が最も多く20% (n=28) であった (表 3-10)。ブルーカラー系の仕事に就いている男性 (48% (n=68)) が、ホワイトカラー系の仕事についている男性 (38% (n=52))¹²⁾より多くなっている。

4. 1. 3. 子どもの特性

子どもの数は、1人から2人の子どもを持っている女性が46% (n=62) いた (表 3-11)。子ど

もの年齢は0才から31才の幅があり、平均年齢は13才であった(表3-14)。子どもの就学状況に関しては、最も多かったのが小学生で35%(n=62)であった(表3-12)。子どもの数を合計した数は194人で、そのうち80%(n=156)は現在の夫(沖縄人夫)との間にできた子どもで、20%(n=38)は前夫(フィリピン男性)との間にできた子どもであった(表3-13)。出生地について、65%(n=127)の子どもが沖縄で生まれている。他方、フィリピンで生まれた子どもが24%(n=47)いる(表3-15)。

4. 2. 家族のコミュニケーション/家族の問題

ここでは、家族(夫・子ども・夫の両親)とのコミュニケーション、家族が抱えている問題について述べる。

4. 2. 1. 夫とのコミュニケーション

「夫とは、社会のこと、家庭のこと、子どもの教育のことなど、どの程度話しをしますか」という質問に、「よくする」と答えたのは43%(n=57)、「時々する」は38%(n=51)、「ほとんどしない」は11%(n=14)、「全くしない」は4%(n=5)であった。よって、81%の女性が日頃、夫とのコミュニケーションを行っていることがわかった。また、「夫との関係は上手くいっていますか」という質問に対して、「大変上手くいっている」と答えた女性は60%(n=80)、「上手くいっている」は13%(n=18)、「あまり上手くいっていない」は14%(n=19)、「全く上手くいっていない」は5%(n=7)であった。よって、夫と良好な関係性を築いている女性が73%いることがわかった。

先行研究では、コミュニケーションをよく行っている国際結婚夫婦は、婚姻満足度も高いという結果が証明されている(施、2000)。本調査でも、夫とコミュニケーションをとっている女性が8割、夫と良好な夫婦関係を築いている女性が7割おり、大半の女性が結婚生活に満足しているのではないかと推察できる。

言語に関しては、夫とコミュニケーションをとる時、日本語を使用している女性が78%(n=104)であった。これは、河原(2004)が指摘しているように、日本語だけが使われるフィリピン人女性と日本人男性の夫婦の大きな言語的特徴と一致していた。さらに、妻たちが、様々な手段を使って日本語を習得し¹³⁾、夫とのコミュニケーションを図ろうと努力している姿がうかがえる一方で、タガログ語や英語を話せない夫が62%(n=82)おり、半数以上の夫側に妻の母語に対する興味や、妻の母語を学ぼうとする態度が薄い傾向がみられる。

また、日本語を話すことに不便を感じると回答している女性が78%(n=104)いた。例えば、自由回答欄には、「言語が難しい」、「漢字の読み書きが難しい」、「沖縄での生活は厳しい。なぜなら、日本語でうまくコミュニケーションが取れないから」、「日本語がわからないのが欠点」、「コミュニケーションをとるのがとても難しい」という彼女たちの回答に見られるように、言いたいことが上手く伝わらない、相手の言っている正確な意味が解らないという言語上の困難から、夫婦間でのコミュニケーションに誤解や齟齬など、何らかの問題が生じている可能性もある。母語で会話ができないフィリピン人女性はストレスと葛藤を経験すると思われる。

さらに、家事にあまり協力的でない夫が67%(n=89)いることがわかった。自由回答欄には、「長男の嫁の場合、(沖縄)文化を理解するのが難しい」、「長男の嫁は大きな責任を負う」、「彼のサムライスタイルが理解できない」という言葉が記述され、一部の女性たちが、自分の夫は家父長的価値観または男性優位志向を持つ傾向があると感じていることがわかった。日本の先行研究(佐竹、ダアノイ、2006)では、フィリピン人妻の視点から見ると、日本人夫は男性優位志向の傾向があるという事例が紹介されているが、一部の沖比国際結婚夫婦の間でも共通の問題点が見出された。また、本調査に参加したフィリピン人女性たちは、高学歴でクリスチャンであることや、参与観察で彼女たちの自己主張の強さが観察できたこと、さらに「フィリピンでは男女平等だけ

表3: 個人および家族の特性(以下2列に表示)

表3-1: 年齢(2011年8月現在)

年齢(才)	フィリピン人妻	沖縄人夫
20~29	1 (1%)	0 (0%)
30~39	39 (29%)	8 (6%)
40~49	65 (49%)	31 (22%)
50~59	16 (13%)	46 (35%)
60~69	3 (2%)	23 (18%)
70~79	0 (0%)	9 (7%)
80~89	0 (0%)	1 (1%)
不明	9 (6%)	15 (11%)

表3-2: 居住地

居住地	フィリピン人妻と家族
北部	国頭村 1 (1%)
	名護市 1 (1%)
中部	沖縄市 8 (6%)
	西原町 3 (2%)
	宜野湾市 2 (2%)
南部	那覇市 13 (10%)
	南城市 3 (2%)
	浦添市 2 (2%)
	糸満市 1 (1%)
	八重瀬町 1 (1%)
	豊見城市 1 (1%)
離島	宮古島 54 (41%)
	石垣島 27 (20%)
	南大東島 12 (9%)
不明	3 (2%)

表3-3: 沖縄に来県した年

来県した年	フィリピン人妻
1970~1979	2 (2%)
1980~1989	6 (4%)
1990~1999	65 (49%)
2000~2009	52 (39%)
2010~2011	1 (1%)
不明	7 (5%)

表3-4: 来県した年齢

来県した年齢(才)	フィリピン人妻
10~19	4 (3%)
20~29	63 (47%)
30~39	41 (31%)
40~49	8 (6%)
50~59	1 (1%)
不明	16 (12%)

表3-5: 学歴

学歴	フィリピン人妻	沖縄人夫
小学校卒	2 (2%)	0 (0%)
中学校卒	0 (0%)	0 (0%)
高校卒	56 (42%)	60 (45%)
専門学校卒	4 (3%)	6 (4%)
短大卒	5 (4%)	4 (3%)
大学卒	50 (37%)	26 (20%)
大学院卒	2 (2%)	2 (2%)
不明	14 (10%)	35 (26%)

表3-6: 結婚している期間

結婚している期間(年)	フィリピン人妻・沖縄人夫
0~9	31 (23%)
10~19	81 (60%)
20~29	13 (10%)
30~39	2 (2%)
不明	6 (5%)

表3-7:ビザの種類

ビザの種類	フィリピン人妻	
配偶者ビザ	19	(14%)
永住ビザ	108	(81%)
就労ビザ	0	(0%)
その他	4	(3%)
不 明	2	(2%)

表3-8:出身地

出 身 地	フィリピン人妻	
ルソン	75	(56%)
ヴィサヤ	26	(20%)
ミンダナオ	16	(12%)
不 明	16	(12%)

表3-9:就業状態 (フィリピン人妻)

職 種	結婚前	結婚後
エンターテイナー	35 (64%)	9 (17%)
ウェイトレス	4 (7%)	3 (6%)
ホテルの清掃係	0 (0%)	16 (30%)
パートの仕事	0 (0%)	7 (13%)
販売員	3 (6%)	2 (4%)
事務員	4 (8%)	0 (0%)
専門・技術職	7 (14%)	6 (12%)
技能・生産業	1 (2%)	3 (6%)
自営業	0 (0%)	2 (4%)
運輸・通信	0 (0%)	2 (4%)
農業	1 (2%)	4 (7%)

表3-10:就業状態(沖縄人夫)

職 種	沖縄人夫	
専門職	20	(14%)
管理職	16	(12%)
事務職	16	(12%)
販売	8	(6%)
農林漁業	28	(20%)
運輸・通信	13	(9%)
技能・生産	13	(9%)
サービス業	6	(4%)
その他	11	(8%)
不 明	8	(6%)

表3-11:子どもの数

子どもの数 (人)		
0	17	(13%)
1	31	(23%)
2	31	(23%)
3	19	(14%)
4	11	(9%)
不 明	24	(18%)

表3-12:子どもの就学状況

就学状況		
保育園生	6	(3%)
幼稚園生	7	(4%)
小学生	62	(35%)
中学生	29	(16%)
高校生	30	(17%)
大学生	11	(6%)
専門学校生	0	(0%)
高校卒	22	(12%)
専門学校卒	4	(2%)
短大卒	1	(1%)
大学卒	5	(3%)

表3-13: 前夫・現在の夫との子どもの数

	子どもの数	
前夫との子ども	38	(20%)
現在の夫との子ども	156	(80%)

表3-14: 子どもの年齢

子どもの年齢(才)		
0～9	62	(32%)
10～19	92	(47%)
20～29	37	(19%)
30～39	3	(2%)

表3-15: 子どもの出生地

出生地		
沖縄県	127	(65%)
神奈川県	3	(2%)
千葉県	2	(1%)
福岡県	2	(1%)
宮城県	1	(1%)
ルソン	34	(17%)
ヴィサヤ	6	(3%)
ミンダナオ	4	(2%)
フィリピン	3	(2%)
不明	12	(6%)

ど、沖縄では違う」という彼女達の語りが聞かれたことから、日本の先行研究で、キリスト教徒・高学歴であるフィリピン人女性たちが「結婚における愛情」を重視し、「個人主義」(定松、1996、p. 72)であることや、「男女平等志向」(佐竹、ダアノイ、2006)が強い傾向があるという事例が、在沖フィリピン人女性の場合にも見られることがわかった。したがって、フィリピン人妻・沖縄人夫の事例でも、コミュニケーションの問題点として、男性優位志向を持つ夫と男女平等志向を持つ妻の間に、ジェンダー観の違いで、何らかの誤解や摩擦が生じていることが想定できる。

調査結果では、夫との関係が上手くいっていない女性が 25% (n=34) いることがわかった。これは、言語上の困難や価値観・態度の相違により、夫婦間コミュニケーションに何らかの問題があることが、原因の一つであると推察できる。

4. 2. 2. 子どもとのコミュニケーション/子どもの問題

子どもとの会話で日本語のみを使用している母親が 40% (n=53) いることがわかった。これは、子どもたちが沖縄の学校や遊びの場でタガログ語を話す機会が少なく、友達も地元の子であることが多いため、母語を学ぶ必要がなく、よって母親は母語を使わず、日本語で対応する傾向があるためであると思われる。他方で、日本語・英語・タガログ語・地方語¹⁴⁾のいずれかをミックスして使い、日ごろ、母語継承を行っている母親が 31% (n=41) いることがわかった。また、将来、子どもに英語・タガログ語・地方語を習得して欲しいと希望している母親が 67% (n=89) いた。さらに、子どもたちに何らかの形でフィリピン文化を継承している母親が 54% (n=72)

いた。例えば、筆者がカトリック教会で行った参与観察では、母親たちが教会の礼拝や集会・茶話会に子どもたちを連れて行き、母親同士でかわすタガログ語を聞かせたり、子ども同士でタガログ語・地方語をかわす場面が見られた。さらに、教会の子ども会の活動を通して、子どもたちはフィリピン舞踊やタガログ語の歌を学び、教会行事で披露していた。このように、言語、価値観、態度、信念（カトリック教の信仰）に関して、半数以上の女性たちが自分のエスニック・アイデンティティを子どもたちに継承しようとしていることがわかった。

子どもの教育状況について満足している母親は74% (n=99)、また、夫と教育観が一致していると答えた母親が86% (n=114) いた。しかし、子どもが学校に馴染んでいないことで心配している母親が46% (n=61) おり、その原因として、自分の子どもが「人間関係」で悩んでいると答えたのが36% (n=22)、次いで、「習慣の違い」16% (n=10)、「勉強の遅れ」11% (n=7)、「言葉の問題」5% (n=3) であった。このように、母親がフィリピン人であることで、習慣・態度・言語が他の子どもと違うために、友達や先生との人間関係のなかで困難を経験したり、授業についていけない子どもたちがいる可能性がある。日本の先行研究でも、フィリピン人の母親を持つことで、子どもが外国人と見なされ、学校で疎外されてきた事例（高畑、2003）や子どもが家庭の中で、複数の言語、複数の文化を経験するため、子どもの自我の発達にかなり影響を及ぼし、学校生活で問題を抱える事例（河原、2004）が紹介されている。

また、ある教会のフィリピン人シスターの話によれば、フィリピン人としてのアイデンティティと日本人（沖縄人）としてのアイデンティティの狭間で揺れや葛藤を経験し悩んでいる子どもたちがおり、彼らは、母親側のエスニック・アイデンティティに劣等感を持ち、母親を軽蔑したり反抗的な態度をとる傾向があることを語っていた。このことから、一部のフィリピン人の母親は、子どもとのコミュニケーションにおいて問題を抱えていることがわかる。このように、沖縄人とフィリピン人の血を受け継ぐ一部の子どもたちは、「アイデンティティの分裂」（河原、2004、p. 183）を経験し、悩んでいることがうかがえる。

4. 2. 3. 夫の両親とのコミュニケーション

夫の親との関係で何らかの問題を抱えている女性が46% (n=61) いた。その原因として、最も多かったのが、「習慣の違い」（36%、n=22）であった。次いで、「食事の問題」（23%、n=14）、「言葉の問題」（18%、n=11）、「外国人妻を嫌う」（11%、n=7）、「子どものしつけ」（8%、n=5）、「その他」（3%、n=2）の理由を挙げた。夫の両親との問題で最も多い理由が「習慣の違い」であった。「習慣の違い」は、価値観や態度の相違と深く関係していると思われる。「彼ら（夫の両親）は、私が外で働いているにもかかわらず、家事をしてほしいと思っている」という自由回答欄の回答にも見られるように、夫の両親が家庭内でフィリピン人妻に家事や育児の負担を負わせ、沖縄の伝統的な嫁役割を強要するなどの要因が考えられる。これは、日本の先行研究（高畑、2003）でも同様の問題点が指摘されている。平等意識の強いフィリピン人女性は、外で働いているにもかかわらず、さらに家事までも負担する夫の両親の嫁に対する不平等な態度が理解できないのではないかと思われる。よって、沖縄家族の習慣に違和感を持ち、それが夫の親とのコミュニケーションの問題の原因になっていることがわかる。

さらに、沖縄の「家」制度と言われている「門中制度」¹⁵⁾では、「家」の存続のために子孫の問題は重要である。長男に位牌と財産を受け継ぐ権利があり、婿養子は家を継げないことから、嫁は特に男子を産むことを期待される。この調査でも、夫の親から早く子を産むように促された女性が25% (n=33) おり、「圧迫を感じた」、「失望した」、「緊張した」、「悲しかった」と感じている。

ることがわかった。

また、沖縄の祖先崇拜や伝統的習慣¹⁶⁾に良い印象を持っている女性が71% (n=95)、これらの土着宗教や習慣に抵抗を感じていないと答えた女性が56% (n=75) いた。一方で、抵抗を感じたことがあると回答している女性が5人に1人(22%、n=29)おり、その理由として「自分の文化や習慣とちがう」(14%、n=19)、「自分の信仰と合わない」(9%、n=12)、「女性に負担がかかる」(7%、n=9)、「その他」(1%、n=1)と答えている。沖縄には祖先崇拜の風習が根強く残り、家族に不幸が起これば、祖先の魂をなだめるためにユタ(祈祷師)に祈祷をお願いする。たいていのフィリピン人女性はカトリック教徒の一神教を信じており、祖先が神になることは信じられない。さらに、お盆の時には、先祖の霊を迎えたり、送る伝統儀式があり、供え物、親戚に出す伝統料理は、姑と嫁がすべて準備することから、女性に負担がかかる。

この調査でも、自分たちのキリスト教的文化・習慣・信条と異なる沖縄土着の祖先崇拜や伝統的習慣に違和感や抵抗感を抱いている女性が22%いることがわかった。このように、沖縄の伝統的嫁役割、「門中制度」に基づく価値観や態度、そして「祖先崇拜」などの信念(宗教観)、伝統的習慣などが一部のフィリピン人女性と夫の親とのコミュニケーションに何らかの問題を引き起こしていることが想定できる。

4. 3. 地域社会でのコミュニケーション

ここでは、彼女たちの地域社会でのコミュニケーションについて、「就業状態」、「地域活動」、「差別の問題」で明らかとなった結果を述べる。

4. 3. 1. 就業状態について

結婚前は71% (n=94)、結婚後は61% (n=81)の女性が就業している。結婚前はエンターテイナーとして働いていたが女性が64%、結婚後は、ホテルの部屋係やパートの仕事に従事している女性が43%であった。これは、家庭生活・結婚生活を守るため、また世間体を考えた上での転職と考えられる。このように、フィリピン人女性たちは、自分たちのアイデンティティを、結婚前のエンターテイナー出稼ぎ労働者という不安定な身分から、結婚後は沖縄社会の責任ある妻・母親・嫁という安定した身分に変化させ、家族を支えるために、単純労働ではあるが就業活動を通して沖縄社会に貢献している。夫や子どもを支える妻・母親としての健全なアイデンティティを確立させ、地域社会の人々とのコミュニケーションを図っていることがうかがえる。

また、職場で上司や同僚との間に何らコミュニケーションの問題を感じていないと答えた女性が70% (n=93)であった。また、今の仕事にやりがいを感じていると答えた女性が74% (n=99)であった。これは、彼女たちの仕事が単純労働に限られ、上司や同僚との複雑なコミュニケーションをあまり必要としないためだと考えられる。しかし、自分の学歴や職歴を活かせていないと感じている女性が4人に1人(23%、n=31)、沖縄では仕事に就きにくいと感じている女性が3人に1人(33%、n=44)いた。沖縄社会では外国人が就ける仕事に限られていること、外国人のための職業訓練プログラムや外国人の就職を支援・斡旋するサービスが不十分なため、彼女たちが自分の能力を生かし、社会に積極的に参加し、なんらかのコミュニケーションを図ろうとしても、その意志が阻害されてしまう状況があると考えられる。

4. 3. 2. 地域活動について

地域活動に関しては、何らかの活動に参加している女性が76% (n=101)であった。「フィリピン・コミュニティー」の活動に参加している女性が41% (n=55)、また、「キリスト教の団体」に属している女性が27% (n=36)であった。その他、「PTA」が16% (n=21)、地域の「婦人会」

が8% (n=11) であった。「フィリピン・コミュニティー」や「キリスト教の団体」などフィリピン人同士が集まるグループ活動に参加している女性が多く、地元の人びとと交りの多い「PTA」や「婦人会」への参加は比較的少ないことがわかる。

このように、在沖フィリピン人女性は、同国人との出会いや交流を求める傾向が強い。日本の先行文献でも、「フィリピン・コミュニティー」や「キリスト教の団体」など同国人の集まるエスニック集団の役割について言及されている。例えば、定松（1996）、石井（2003）の文献を参考にしてみると、次の5つの機能をはたしていることがわかる。(1)「悩みの相談」、(2)「情報交換」、(3)「ストレスや孤独の解消」、(4)「エスニック・アイデンティティの保持/エスニック集団の連帯」、(5)「子どもへの母文化・母語継承」である。

筆者が行った参与観察からも、少なくとも4つの機能を見出すことができた。まず、フィリピン人女性たちは、カトリック教会のフィリピン人神父やシスターに夫との関係など深刻な悩みを相談し、アドバイスを受けていた（「悩みの相談」）。また、礼拝後の集会や茶話会は、仲間から就職口の情報を得たり、沖縄での生活に必要な情報を得る場となり（「情報交換」）、同国人と母語でコミュニケーションをすることでストレスを発散させ、互いに孤独感を軽減している（「ストレスや孤独の解消」）。さらに、自分の子どもたちをフィリピン・コミュニティーや教会活動に参加させることにより、同国人との交流を通して、フィリピンの母語や母文化に接触する機会をふやしていた（「母語・母文化継承」）。このように、エスニック集団の活動を通して、彼女たちは沖縄社会で生き抜くために必要な精神的・物質的サポートを得ることができていると思われる。沖縄という異文化社会に適応していく中で生じるコミュニケーションの問題や悩みを、エスニック集団の仲間とコミュニケーションをとることによって、その解決策を見だし、葛藤やストレスを解消していくフィリピン人女性の姿が垣間見られた。

4. 3. 3. 差別

差別を受けたことがないと回答している女性が53% (n=70) であった。しかし、差別を受けたことがあると回答している女性が22% (n=29) いた。その理由として、人種差別（フィリピン人だから）、言語上の差別（日本語が話せないから）、偏見（貧困、エンターテイナー）、文化・価値観の違いが挙げられた。

フィリピン人ということで人種差別を受けている理由があることから、沖縄社会の中でも、外国人に対する差別があることがわかる。これは、日本の先行研究でも言及されているアジア人女性に対する民族差別（笠間、1996）が、沖縄人の意識の中にも、少なからず、あることが推察できる。また、言語上の差別は、「日本語が話せない」＝「一人前ではない」と見下されるなどの理由があるのではないか。さらにフィリピン人に対する偏見には、フィリピンが途上国で「貧しい」、「フィリピン人女性＝エンターテイナー」というイメージが、沖縄社会の中にも見られることがわかった。文化・価値観の違いによる差別の背後には、沖縄の人々がフィリピン文化や価値観を低く見なし、それが差別につながっているものと思われる。

このように、ホスト社会沖縄の人々のフィリピン人女性に対する差別的態度には、民族的・言語的・文化的差別などがあり、これらの差別的態度は、フィリピン人女性が沖縄の人々と対等な立場でコミュニケーションを図ろうとするときの、阻害要因となっていることがわかる。

4. 4. 現在の状況

彼女たちの現在の状況を知るために、「母国との関係」、「現在抱えている不安や悩み」について明らかとなった点を述べる。

4. 4. 1. 母国との関係

母国を懐かしく思っている女性が 70% (n=93) いることがわかった。また、母国の家族と定期的に連絡を取りあっている女性が 88% (n=117) おり、連絡の頻度は、週に 1 回が 42% (n=57)、月に 1～2 回が 30% (n=41)、毎日または週に 2～3 回が 12% (n=17) であった。連絡手段は、電話が 39% (n=76)、インターネットが 26% (n=50) であった。さらに母国に送金をしている女性が 87% (n=116) おり、そのうち月に 1 回の頻度で送金している女性が 39% (n=52)、一人平均 34,942 円の仕送りを行っていた。そのうち夫が送金をサポートしていると答えた女性が 55% (n=73) であった。

このように、大半の女性が母国の家族と定期的に連絡を取り合い、9 割の女性が母国に送金をし、半数の夫がその送金をサポートしていた。このことから、フィリピン人女性が、結婚後も家族とのつながりを大切にし、半数の夫がそのことに理解を示していることがうかがえる。日本の先行研究では、結婚後も家族・親戚との絆を大切にするフィリピン人の価値観を、「拡大家族的価値観」(佐竹、ダアノイ、2008、p. 109) と説明している。このような価値観が、在沖フィリピン人女性の事例でも見ることができる。連絡、送金を通して、母国の家族とコミュニケーションを図ることによって、彼女たちは、異文化社会で生活していく上で「生きがい」を与えられているのではないかと。

4. 4. 2. 現在抱えている不安や悩み

現在、何らかの不安や悩みを抱えている女性が 20% (n=27) いることがわかった。不安や悩みを抱えている理由として、「夫との関係」が 11% (n=14)、「日本人 (沖縄人) の心を理解するのが困難」が 6% (n=8)、「子どもの教育の問題」、「孤独」と答えた女性が、それぞれ 4% (n=5)、「日本人 (沖縄人) 社会の閉鎖性」2% (n=3)、「新しい環境に慣れることができない」2% (n=2) と答えた。

「現在抱えている不安や悩み」の理由として、夫との関係で悩んでいる女性が最も多かった。その原因として、上述したように沖縄人夫の男性優位指向についていけない女性の葛藤があると推察できる。また、自由回答欄に記述された「家族の強い絆がない」、「夫が家族のために時間を割かない、仕事優先である」という言葉の裏には、家庭よりも仕事を優先する沖縄人夫 (これは先行研究 (佐竹、ダアノイ、2008) の日本人夫の事例でも共通の問題が見られた。) に不満を抱いているフィリピン人女性がいることが見受けられる。フィリピン人女性は「家族第一主義」(佐竹、ダアノイ、2008、p. 116) と言われるが、ここでの「家族第一主義」とは、個人主義と矛盾するものではなく、家族の成員は個人として認められ、対等な愛情を基盤にした夫婦を中心に、家族のコミュニケーションを重視した個人主義的な家族観を大切にしているということであり、家の存続やしきたりを重視する家父長的な家族中心主義とは意味が異なると思われる。

さらに 2 番目に多かった「日本人 (沖縄人) の心を理解するのが困難」という悩みは、彼女たちが沖縄社会に適応する際、抱えているコミュニケーションの問題と捉えることができる。例えば、自由回答欄には「沖縄の人は他人の気持ちを考えない。私たちのことを無教養だと見なしている」、「フィリピン人はお金のためなら何でもすると思っている」、「沖縄の人は自己中心」、「これはダメ、あれはやらないでと指図する」、「私と日本人 (沖縄人) 女性を比べる」という言葉があるように、フィリピン人女性を無教養と見下したり、「フィリピン人=貧しい=金のためなら何でもやる」といった偏見や、「こうしなさい」と沖縄のやり方を押し付けたり、相手の文化や価値観を尊重しない一部の沖縄人の態度がフィリピン人女性の心を傷つけ、沖縄の人々の心を理解す

るのが困難であると感じさせていると考えられる。このような一部の沖縄人がフィリピン人女性に対して抱く偏見がフィリピン人女性と沖縄人の健全なコミュニケーションを阻害する要因の一つになっていると思われる。

5. まとめ

これまで、沖縄県在住フィリピン人女性と家族・地域社会・母国との関係をコミュニケーションの観点から考察してきた。調査結果を前向きに捉えてみると、夫とコミュニケーションを行い、夫と良い関係を築いている女性が7割以上いることがわかった。また、沖縄での子どもの教育状況に概して満足していると答えた母親は7割であった。さらに、夫の親との関係を上手く維持していると答えた女性が7割、沖縄の祖先崇拜や伝統的習慣に抵抗を感じていないと答えた女性が6割いた。沖縄での生活に概して満足していると答えた女性は8割に上った。このように深刻な問題を抱えているのは2割から3割の一部のフィリピン人女性であることが推察できる。この数値は、半数以上のフィリピン人女性が沖縄社会にうまく適応していることを裏付けるものではないかと思われる。例えば、自由回答欄には、「沖縄での生活はシンプルで、フィリピンでの生活と似ている」、「沖縄は環境が美しく、気候や食事が適応しやすい」、「沖縄は住みやすく、平和で安全」、「沖縄での生活に満足している」、「ゆったり、リラックスした生活ができる」、「沖縄の人々は、親切で助けてくれる」、「沖縄の人々は、付き合いやすく、協力的である」などの回答が多く見られ、沖縄とフィリピンの気候や風土が似ていて住みやすいことや、沖縄の人々が、親切で寛容であるなどの声が聞こえた。沖縄社会がフィリピン人女性にとって適応しやすい社会であるという可能性があり、フィリピンの人々を受け入れる多文化共生の潜在的性質を内包しているかもしれないということが推察できる。

しかし、一方で、一部の在沖フィリピン人女性たちは、家族や地域社会の人々との関係において何らかの問題を抱えていた。また、その問題点を日本の先行研究の事例と比較した結果、在沖フィリピン人女性も、他府県に住む在日フィリピン人女性と共通の問題を抱えていることがわかった。例えば、男性優位志向を持つ沖縄人夫と男女平等志向を持つフィリピン人妻の夫婦間での葛藤や、家父長的習慣を持つ夫の家族との関係において、個人主義の傾向を持つフィリピン人女性はストレスを抱えること、子どもがフィリピンのエスニック・アイデンティティを否定的に捉えてしまうことなどいくつかの共通点が見られた。沖縄独特の問題としては、「門中制度」や祖先崇拜、伝統的習慣に対して抵抗感を抱くフィリピン人女性が少なからずおり、これが特に、夫の両親とのコミュニケーションの問題の原因となっていた。

ここでは、フィリピン人女性が家族・地域社会とのコミュニケーションにおける葛藤・ストレスを解消し、彼女たちが沖縄社会でうまく適応していくために、沖縄というホスト社会はどのようにサポートし、またホスト社会自身がどのように変わっていかなければならないのかを考えたい。

第一に、夫とのコミュニケーションにおいては、「言語」の問題がある。夫婦の間では、フィリピン人女性にだけ日本語を話す努力が求められているため、夫は妻の言語的ストレスや葛藤を理解し、妻の母語を学ぼうとする姿勢が大切である。また、フィリピン人妻が夫と対等な立場でコミュニケーションを図ることができるように、夫側に価値観や意識を変革することが求められていると言える。

第二に、子どもとのコミュニケーションにおいては、子どもへの母語・母文化継承を行ってい

る母親が多かった一方で、子どもたちがアイデンティティの「揺れ」や「分裂」を経験し、母親側のエスニック・アイデンティティに劣等感を抱くケースがある。これは、子どもたちを取り巻く社会が、フィリピンのエスニック・アイデンティティにネガティブな反応を示すためだと考えられる。子どもたちが社会で、沖縄人とフィリピン人の両方のエスニック・アイデンティティを自由に表現できるように、沖縄のホスト社会はフィリピン人をはじめ外国人のエスニック・アイデンティティの中にユニークさを発見し、それを肯定的に認め、もっと価値を置くべきであると考ええる。

第三に、夫の両親とのコミュニケーションにおいて、夫の両親は、自分たちの伝統的な習慣や価値観を一方的に押し付けるのではなく、フィリピン人女性の習慣や価値観、宗教観を尊重し、新たな家族関係を築いていくことが求められている。

第四に、地域社会とのコミュニケーションにおいては、フィリピン人女性たちが自分の学歴や能力に見合った仕事に就けるように、地域のサポート体制が必要である。例えば、就職カウンセリングを通して、彼女たちの能力を生かした仕事を積極的に斡旋していくことや、職業訓練を通して、彼女たちに技能を身に付ける機会を与えるなど、彼女たちが自分の能力を生かして社会に参加し、地域の人々とコミュニケーションを図っていくことができるように、就職に関する政策・プログラム・サービスの整備が重要になってくる。

さらに、ホスト社会は、フィリピン人女性達のエスニック・グループが活動を維持していけるように、例えば、場所や資金を提供したり、彼女たちの集会を温かく見守り、彼女たちの活動に関心を示すなど、きめ細かいサポートをしていく必要がある。

第五に、地域社会における差別問題において、ホスト社会は、自分たちが無意識のうちに抱いてしまっている民族的・言語的・文化的差別や偏見に対して敏感になり、その差別意識の基になっている根本的な考え方を見直し、変えていかなければならないと思う。

第六に、現在の状況に関して、「母国の関係」について考察したが、ホスト社会と家族は、彼女たちの母国の経済的事情を考慮し、彼女たちが母国の家族との関係を維持していけるように、支援していくことが望まれる。

これまで、沖縄県在住フィリピン人女性の生活実態調査を通して、彼女たちの異文化適応の問題をコミュニケーションの観点から考察してきた。反省点としては、アンケート調査と短時間の参与観察のみだったので、フィリピン人妻と沖縄人夫やその家族の文化的側面の相違を細かく描写しコミュニケーションの問題点を探るには、まだ不十分さが残った。今後は、インタビュー調査を通して、フィリピン人女性と沖縄人夫の文化的側面の相違により生じる夫婦間のコミュニケーションの問題をさらに細かく分析し、その原因を明らかにしていきたい。また、フィリピン人女性と沖縄人夫の夫婦間におけるコミュニケーションの誤解や摩擦が暴力（DV）に発展していく過程や要因などを分析していくことも、今後の研究課題としていきたい。

註

- 1) 厚生労働省（2005）人口動態統計 年報 主要統計表「夫婦の国籍別にみた婚姻件数の年次推移」
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei05/index.html> 閲覧日：2013年9月9日
- 2) 沖縄の陸地面積は、日本全土の0.6%にすぎないが、在日米軍基地の75%が沖縄に集中している。沖縄島の約20%（232k㎡）は米軍基地によって占められている。基地周辺には、米兵を相手に商売をする歓楽街が形成されている。例えば、宜野湾市の普天間基地の近辺には真栄原社交街、浦添市のキャンプキンザーの向かいには泉町社交街、金武町のキャンプハンセンの南側を走る国道329号沿いにも歓楽街が形成されている。
- 3) 法務省入国管理局の『在留外国人統計』によれば、1991年、興行ビザで沖縄県に入国した外国人労働者は396

- 人であったが、2001年には491人に増え、約1.2倍増加している。しかし、2011年には、65人に減少し、これは、2005年に入管法が改正され、興行ビザによる入国審査が厳しくなったことが原因であると考えられる。
- 4) 法務省入国管理局の『在留外国人統計』によれば、1991年に沖縄県で「日本人の配偶者」として在住している外国人が2,185人であったが、2001年には、2,296人に増加している。さらに、1991年、永住者ビザを取得した外国人が218人であったが、2001年には1,217人と5.6倍に増加している。これは、居住年数が増加するのに伴い、配偶者ビザから永住者ビザに切り替える外国人妻が増えていることを意味すると考えられる。
 - 5) 琉球列島米国民政府（りゅうきゅうれつとうべいこくみんせいふ、英語：United States Civil Administration of the Ryukyu Islands）は、アメリカ軍が沖縄に設けた統治機構で、略称としてUSCAR（ユースカー）といわれる。単に「米国民政府」とも呼ぶ。
 - 6) 終戦直後、米軍基地関係労働者として6,000人のフィリピン人が在沖していたが、1965年、米国民政府（USCAR）は、地元の沖縄住民を優先的に雇用するため、フィリピン人労働者を全面解雇した。多くのフィリピン人がフィリピンに帰国せざるをえない状況に追い込まれた。1965年をもって、在沖フィリピン人労働者の数は減少傾向をたどった。（鈴木、玉城、1996）
 - 7) CiNiiの検索システムで、キーワード「フィリピン 沖縄」を検索したところ、フィリピンにおける沖縄県出身者移民について（11件）、米軍統治下沖縄におけるフィリピン人について（2件）、沖縄県のフィリピン人労働者について（2件）の先行研究があるが、沖縄人男性と国際結婚したフィリピン人女性の異文化適応の問題を扱った研究は見当たらなかった。
 - 8) 本調査の事例でも、「現地出会い型」、「国内出会い型」のフィリピン人女性が見られたが、「行政仲介型」、「ブローカー仲介型」の女性はほとんど見られなかった。その代わりに、「親族・知人仲介型」のケースが見られた。
 - 9) 池田・クレマー（2001）は、自己の形成には信念、価値観、態度が大きく関与しており（p. 7）、それらは、幼少時からの社会化の過程を通して培われてきたもの、つまり文化によって形成されている（pp. 11-12）と述べている。
 - 10) アンケート調査票の作成は、『女性の帰国適応問題の研究』（伊佐、2000、pp. 297-316）、『フィリピンー日本国際結婚』（佐竹、ダアノイ、2006、pp. 47-51）の文献を参考にした（付録参照）。
 - 11) 厚生労働省統計要覧の人口動態統計（平均初婚年齢 年次別）によると、2011年度の平均初婚年齢は、夫30.7歳、妻29.0歳で、夫婦の年齢差は1.7歳であることがわかる。
http://www.mhlw.go.jp/toukei/youran/indexyk_1_2.html 閲覧日：2013年9月9日
 - 12) 専門職、管理職、事務職をホワイトカラー系、販売、農林漁業、運輸・通信、技能・生産、サービス業をブルーカラー系の仕事に分類した。
 - 13) 日本語習得方法について尋ねたところ、38%の女性が「夫から学ぶ」、22%が「日本人の友達から学ぶ」、18%が「日本語の本から学ぶ」、8%が「日本語学校」と答えた。
 - 14) フィリピンの言語は、公用語がタガログ語と英語であるが、その他にも、地方出身者が使う地方語、例えば、ヴィサヤ語、セブ語、パンガシナン語、ビコール語などがある。
 - 15) 門中とは、始祖を共通にし、父系血縁によって結びつく集団。そのおもな機能は祖先祭祀であるが、共有財産の運営母体や日常的な親睦団体として機能を有している例もある。17世紀ころから、王府時代の士族層を中心に生成発達してきたとされ、1689年の系図座の開設にともなう身分制の確立強化にともなって整えられてきた制度である。士族層を中心に発達してきたものであり、時代とともに平民層、農村社会に模倣されてきた。門中は、家譜を有し、始祖の墓所と共通の門中墓の前で定期的な祖先祭祀をおこない、父系血縁による帰属原理を貫くうえで、婿養子をとることなく養子は同門中から取り、先祖の位牌の祭祀権は長男が排他優先的に継承することを目指している集団である。（『沖縄大百科事典 下巻』（比嘉、1983、p. 645））
 - 16) 沖縄の伝統的習慣とは、例えば、旧盆の際、仏壇への供え物や親族に出す伝統料理を女性達が準備することや、冠婚葬祭、正月などの行事の際、女性達が料理など、下準備をすることを含む。

引用文献

- 池田理知子、クレマー、E. M. (2001) 『異文化コミュニケーション・入門』有斐閣。
- 伊佐雅子 (2000) 『女性の帰国適応問題の研究—異文化受容と帰国適応問題の実証的研究—』多賀出版。
- 石井由香 (2003) 「移民の居住と生活—現状と展望—」駒井洋監修、石井由香編著『移民の居住と生活』（pp. 20-55）、明石書店。
- 笠間千浪 (1996) 「滞日外国人女性と《ジェンダー・バイアス》—日本的受入れの一側面と問題点—」宮島喬、梶田孝道編『外国人労働者から市民へ—地域社会の視点と課題から—』（pp. 165-186）、有斐閣。
- 河原俊昭 (2004) 「在住フィリピン人女性の新しい言語アイデンティティ」小野原信義、大原光子編著『ことばとアイデンティティ』（pp. 177-200）、三元社。

- 桑山紀彦（1995）『国際結婚とストレス—アジアからの花嫁と変容するニッポンの家族』明石書店。
- 厚生労働省（2010）「厚生統計要覧 第1編人口・世帯 第2章人口動態 婚姻件数、年次×夫妻の国籍別」閲覧日 2013年8月31日 <http://www.mhlw.go.jp/toukei/youran/data24k/1-37.xls>
- 賽漢卓挪（2006）『『国際結婚』研究における『異文化』と『同化』—アジア人妻へのまなざしをめぐって—』『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』第53巻、第1号、75-87。
- 佐竹眞明、ダアノイ、M. A.（2006）『フィリピン—日本国際結婚—多文化共生と移住—』めこん。
- 定松文（1996）「家族問題—一定住外国人の家族生活と地域社会—」宮島喬、梶田孝道編『外国人労働者から市民へ—地域社会の視点と課題から—』（pp. 65-82）、有斐閣。
- 施利平（2000）「婚姻満足度の規定要因としてのコミュニケーション—国際結婚夫婦を対象としたカップル単位の分析から—」『年報人間科学』第21巻、159-174。
- 鈴木規之、玉城里子（1996）「沖縄のフィリピン人—一定住者としてまた外国人労働者として—（1）」『琉球大学法文学部紀要』第57巻、61-88。
- 鈴木規之、玉城里子（1997）「沖縄のフィリピン人—一定住者としてまた外国人労働者として—（2）」『琉球大学法文学部紀要』第58巻、229-260。
- 高畑幸（2003）「国際結婚と家族—在日フィリピン人による出産と子育ての相互扶助—」駒井洋監修、石井由香編著『移民の居住と生活』（pp. 255-291）、明石書店。
- 武田丈（2005）『フィリピン女性エンターテイナーのライフストーリー』関西学院大学出版会。
- 西口理紗（2009）「フィリピン人女性の滞日形態—国際結婚の背景—」『グローバル都市研究』第2巻、157-174。
- バレスカス、M. R. P.（1994）『フィリピン女性エンターテイナーの世界』明石書店。
- 比嘉敬（1983）『沖縄大百科事典 下巻』沖縄タイムス社。
- 法務省（1991）『平成3年版 在留外国人統計』法務省入国管理局。
- 法務省（2001）『平成13年版 在留外国人統計』法務省入国管理局。
- 法務省（2011）『平成23年版 在留外国人統計』法務省入国管理局。
- 宮島喬、長谷川祥子（2000）「在日フィリピン人女性の結婚・家族問題—カウンセリングの事例から—」『応用社会学研究』第42巻、1-14。
- 宮本勝（1993）「宗教と世界観」綾部恒雄、永積昭（編）『もっと知りたいフィリピン』（pp. 103-135）、弘文堂。

3. Office Work
(Public official, General office worker, Typist, Receptionist, Money collector)
4. Sales Person
(Storekeeper, Wholesaler, Restaurant owner, Sales assistant, Door-to-door sales person)
5. Agricultural/Forestial/Fishing Worker
(Agriculture, Fishing, Gardening, Livestock-farming, Fish and shellfish collector)
6. Transport/Correspondence Clerk
(Driver, Telephone operator, Mail carrier, Pilot)
7. Technical/Manufacturing Worker
(Assembly worker, Repairman, Food manufacturing worker, Tailor)
8. Service Industry Worker
(Receptionist, Cook, Waiter, Hairdresser, Laundry)
9. Other
(Housework,)

- 8) Who takes charge of holding money in your family?
1. Wife 2. Husband 3. Both wife and husband
- 9) How much house work does your husband take on? Example; cooking, cleaning the house, etc.
1. Quite a lot of housework 2. Half of housework 3. A little housework
4. Not at all
- 10) How often do you talk with your husband about social issues, your family, and education of your children?
1. Very often 2. Sometimes 3. Not so often 4. Not at all
- 11) How much do you agree with your husband regarding the sense of values (kabutihang asal) and the way of thinking?
1. Strongly agree 2. Agree in some degree 3. Disagree
- 12) How much do you agree with your husband about educating of children (pagpapalaki sa mga anak) ?
1. Strongly agree 2. Agree in some degree 3. Disagree
- 13) What language do you use when you talk or communicate with your husband?
1. Japanese 2. Tagalog 3. English 4. Other ()
- 14) Does your husband permit or allow you to go to the church, or to practice your own religion?
1. Yes 2. No 3. Sometimes
- 15) Is your husband supportive of you to work outside?
1. Very supportive 2. Supportive in some degree 3. Not Supportive
- 16) Does your husband permit or allow you to go out?
1. Yes 2. No 3. Sometimes
- 17) Do you have a good relationship with your husband? If No, what is the reason?
1. Very well 2. I think so 3. Not so much 4. Not at all 5. Divorced
Please state the reason ()

<**I will ask about your children.**>

- 18) What type of school do your children attend? Please choose from the box below and write the number.

Options : 1. Public 2. Private 3. International 4. Other

Child ①—() Child ②—() Child ③—()

Child ④—() Child ⑤—()

19) Do your children get along well with the other local Japanese children in Okinawa?

1. Very well 2. So-so 3. Not so much 4. Not at all

20) Are you satisfied with the educational condition (system) of your children?

1. Very much 2. So-so 3. Not so much 4. Not at all

21) What language do you use when you talk or communicate with your children?

1. Japanese 2. Tagalog 3. English 4. Other ()

22) Do you teach your children English, Tagalog or your own dialect?

1. Very often 2. Sometimes 3. Not at all

23) Do you want your children to learn English, Tagalog, or your dialect in the future?

1. Very much 2. In some degree 3. Not so much 4. Not at all

24) Are you teaching your children about Philippine culture?

1. Very much 2. In some degree 3. Not so much 4. Not at all

25) Do your children adjust themselves in the school or the kindergarten smoothly?

1. Very smoothly 2. Smooth in some degree 3. Not very well

26) If your children don't adjust themselves to the school, what do you think is the reason?

1. Fall behind in their studies 2. Human relationships
3. Difference in lifestyle 4. Trouble in language
5. Other ()

27) Are there different behaviors you notice about your children?

1. Yes 2. No

What are they? ()

<I will ask about the relationship with your parents-in-law. If you are separated, please write about your relationship on your past marriage.>

28) Are you living with your parents- in-law now? If Yes, which parents-in-law?

1. Father-in-law 2. Mother-in-law 3. Both of them

29) Were your parents-in-law opposed to your marriage?

1. Your parents : 1. Yes 2. No

2. Your husband's parents : 1. Yes 2. No

30) Do you have any problem with your parents-in-law?

1. A lot of problem 2. Some problems 3. A little problem 4. No problem

31) If you have problem with your parents-in-law, please specify?

1. Difficulty in language 2. Difference in customs
3. Difference in the discipline of children 4. Difference in traditional cuisine
5. They simply don't like a foreigner wife 6. Others ()

32) Have you ever been asked to have a baby by your parents-in-law? If Yes, how did you feel?

1. Yes 2. No If yes, how did you feel? ()

33) How do you think about the ancestor worship and the traditional customs of Okinawa? (Such as making a

special meal for To-to-me (altar worship), the Bon Festival (All Souls Day) , and the New Years holidays)

1. A very wonderful custom 2. Just a good custom 3. Not a good custom

4. A troublesome custom

34) Have you ever felt uncomfortable with the ancestor worship and the traditional customs of Okinawa?

1. Yes 2. No

35) If you answered “Yes” in the question 34, what is the reason?

1. Incompatible with your belief 2. Have too much burden on women’s hands

3. Difference from your own culture and customs 4. Other ()

36) Do your parents-in-law permit or allow you to go to the church?

1. Very much 2. In some degree 3. Not so much 4. Not at all

37) Are you getting along well with your parents-in-law?

1. Very well 2. I think so 3. Not so much 4. Not at all

What is the reason why you are not getting along well with your parents-in-law?

Reason()

<I will ask about your relationship with your friends.>

38) How many close friends do you have in Okinawa?

How many? Filipino friends () Japanese/Okinawan friends ()

39) If you have some close friends, how did you get to know them?

1. Through the introduction of friends

2. Colleagues at work place 3. At the church

4. In the Philippine community 5. Other ()

40) How often do you see them?

1. Very often 2. Sometimes 3. Not so much 4. Not at all

41) Do you share your experiences with your children and with your husband to your close friends?

1. Yes 2. No

<I will ask about your daily life in Okinawa.>

42) What kind of visa do you have at present?

1. Spouse visa 2. Permanent visa 3. Working visa 4. Other ()

42) Where are you living now?

1. Naha City 2. Ginowan City 3. Urasoe City 4. Yomitan Village

5. Other city ()

43) How did you learn Japanese language?

1. In Japanese school 2. In Japanese language books 3. Learn from your husband

4. Learn from your Japanese friends 5. Others ()

44) Do you feel uncomfortable speaking in Japanese?

1. Always 2. Sometimes 3. Hardly ever 4. Not at all

45) What kind of organizations or associations do you belong in your community?

1. Women’s club 2. Christian group 3. Philippine community

4. Japanese ancestry group 5. Parent-Teacher Association (PTA)

6. Hobby group 7. Sport circle 8. Volunteer activity 9. NGO activity

What kind of job? ()

57) After getting married, did you continue to work?

1. Yes 2. No What kind of job? ()

58) Do you have any problem in your relationship with your boss or your co-workers?

If Yes, please state briefly the problem.

1. Yes 2. No

What problem? ()

59) Are you satisfied with your job?

1. Very satisfied 2. Satisfied in some degree 3. Dissatisfied

60) What is the reason why you looked for a job?

1. To help your husband 2. Send money to your family in the Philippines
3. Make good use of your ability 4. Experience living more closely with Japanese people
5. For your children's educational expenses
6. Other ()

61) Do you think that you can make good use of your educational and working background in the past here in Okinawa?

1. Yes 2. No

62) Was it easy for you to get a job in Okinawa?

1. Very easy 2. Easy in some degree 3. Not easy 4. Very difficult

<I will ask about your family structure.>

63) Please fill out the following table below with reference to *1~*4.

	Age *1	Birth place *2	Educational Background *3	Sex *4
Example	35	Ilocos	Senior High School	F
Yourself				
Your husband				
Your child ①				
Your child ②				
Your child ③				
Your child ④				
Your child ⑤				

*1. Please write the age of each family member.

*2. Please write the birthplace of each family member from the following options.

- (1. Ilocos 2. Zamboanga 3. Luzon 4. Calabarzon 5. Bicol 6. Visayas 7. Mindanao
8. Davao 9. Okinawa 10. Other region or prefecture (Please write down the name of other

prefecture or region directly in the blank.))

*3. Please write the educational background of each family member from the following options.

- (1. Elementary school graduate 2. Junior high school graduate 3. Senior high school graduate 4. Vocational school graduate 5. Junior college graduate 6. University graduate 7. Graduate university 8. Other (Please write the type of school directly.))

*4. If the member is female, write F. If the member is male, write M.

64) What do you think about life in Okinawa? Please write one positive thing that you like “best” and one negative thing that you don’t like about Okinawa.

Thank you very much for your cooperation.

注) 本研究のアンケート調査票作成においては、『女性の帰国適応問題の研究』(伊佐、2000、pp. 297-316)、『フィリピンー日本国際結婚』(佐竹、ダアノイ、2008、pp. 47-51)の文献を参考にした。